

大学生による学校支援ボランティアの現状と課題

目白大学人間学部 杉本 希映

【要約】

1997年の「教育改革プログラム」(当時の文部省)に「学校支援ボランティア」という言葉が使用されて以降、学校現場では保護者、地域の人材、企業等がボランティアとして学校をサポートする活動が盛んに行われている。本稿では、大学生による学校支援ボランティアについての現状を、これまでの研究を概観することで把握し、課題を明らかにすることを目的とする。参加者、活動内容、ニーズ、効果・影響、システムにおける現状をまとめた結果、学生によるボランティアを報告している多くが教員養成課程の大学の派遣事業であること、活動内容としては学習サポートが多く、特に個別の支援ニーズを持った子どものサポートを担っていること、活用学校、学生とも活動に対しては肯定的な評価をしていること、派遣のシステムとしては大学のかかわり度によって3つに分類されることが明らかとなった。しかし現状での調査は実態把握にとどまり、実証的な検証がなされているとはいえない。今後の課題として、①学校側と学生側双方のニーズの把握、②ボランティアによる効果測定 of 尺度開発と効果に影響を及ぼす要因の検討、③研修プログラムを含めたシステムの構築と効果の検討の3点を実証的に検証していくことが挙げられた。

キーワード：ボランティア活動、学校支援、大学生

はじめに

本稿では、近年急速に広がりを見せる学校支援ボランティアについて、特に大学生に焦点を絞り、現状を把握し、課題を明らかにすることを目的とする。

学校支援ボランティアとは、「学校の教育活動について地域の教育力を生かすため、保護者、地域の人材や団体、企業等がボランティアとして学校をサポートする活動」と定義される。この言葉は、1997年に当時の文部省が策定した「教育改革プログラム」の中の「学校外の社会との積極的な連携」の方策として初めて使用された。以降、1997年・1998年の中央教育審議会、1999年の生涯学習審議会においても、学校支援ボランティアの推進が取り上げられ、2000年度には、「学校におけるボランティア等活用実践研究」の委託事業が開始された。導入の背景には、生涯学習という視点から地域住民

の成果活用 of 場というニーズと、学校教育における多様化する問題への対応というニーズがある。1990年代後半に登場してきた学校支援ボランティアは、これらのニーズを受け10数年を経た現在、学校現場において広く定着しつつある。その活動は、国立教育政策研究所社会教育実践研究センターが全国的な活動報告をまとめている(2008)。しかし、参加人数が少数である大学生を対象とした活動については、その報告に反映されているとは言い難い。

そこで本稿では、NII論文情報ナビゲータ(CiNii)において、「学校支援ボランティア」でキーワード検索し抽出された論文のうち、主に大学生の学校支援ボランティア(以下、学生Vo)を対象とした事例報告、研究論文を選択し検討することとする。今回は、学校支援ボランティアの実態の把握を目的とするため、活動実践あるいは調査研究に基づかない思弁的論考の

みの論文は選択していない。

学校支援ボランティア参加者

文部科学省の委託調査である「学校支援地域本部事業」実態調査研究（三菱総合研究所，2010）の結果では，本部事業に登録しているボランティアの属性として，保護者46.8%，地域住民46.9%，学生1.9%となっている。青森県の小・中学校を調査した高橋（2006）の調査によると，ボランティア参加者の属性は，地域住民92%，保護者81%，祖父母45%，各種団体36%，退職教員18%，高校生・大学生5%となっている。また，鹿児島県鹿児島市の登録者数の統計では，60代以上が半数を占め，20代はその1/10程度となっている（鹿児島市教育委員会，2010）。これらから，大学生が学校支援ボランティアとして参加している割合は，全体の中では少ないことがうかがえる。

学生Voによる活動について報告されている論文を概観したところ，Table 2に示したように北海道教育大学の五十嵐・紺野（2010）をはじめ主にボランティア派遣を実施している教員養成課程の大学によるものがほとんどである。教員養成課程以外で派遣を行っている事例としては，目白大学人間学部心理カウンセリング学科の「メンタルサポート・ボランティア事業」（日高・黒沢，2007他）があるが，ほかには見当たらない。これらの報告からは，大学生の学校支援ボランティア参加者の多くは，教員養成課程在学者と捉えることができる。学校支援ボランティアの性質上，将来教員を目指す学生が興味を持ちやすいため，事実を反映している可能性もある。しかし，調査報告されているものは大学が派遣に関わっているケースであり，それ以外に大学を通さずに個別に参加している学生は把握されていない。そのため，どのような学生が学校支援ボランティアに参加しているのかを正確に把握するためにはさらなる調査が必要である。

学校支援ボランティアの活動内容

学校支援ボランティアの支援内容には，子どもの学習を効率よく進めるため，教師の指導を手助けする「学習アシスタント」，子どもにとっ

での安全で快適な学習環境を整備する「環境サポーター」，子どもの学習の理解を深めるために，直接学習指導を行う「ゲスト・ティーチャー」，専門性を発揮しながら，学校施設の維持管理を支援する「施設メンテナー」等がある（文部科学省生涯学習政策局，2008）。

国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（2008）が行った全国調査では，最も多い活動内容が登下校の安全指導で活用校の78.5%で実施，ついで学習支援活動が68.4%，環境整備が68.2%となっており，「環境サポーター」が多いことがわかる。清國（2011）のある県で実施されている学校支援ボランティアに関する調査では，9割以上が大学生以外の地域住民が調査対象であるが，最も実施されているのが「環境サポーター」（登下校の見守り，読み聞かせ）であった。高橋（2007）の調査回答属性の98%が20代以上の調査では，「ゲスト・ティーチャー」が最も多く58%，ついで「環境サポーター」33%，「学習アシスタント」は13%となっている。林・淡野・片岡・丹羽・高橋（2009）による奈良市内教員対象アンケートによると，地域住民による支援で最も多いのは「環境サポーター」（登下校の見守り）で75.1%の学校が活用，大学生による支援で最も多いのは「学習アシスタント」で51.5%の学校が活用している。

一方，参加者を大学生を対象を絞った調査としては，五十嵐・紺野（2010），阪根（2006）酒井（2011），原田・梶原・吉川・樋口・江上・四戸・杉野・松浦（2011），松本・大岩・藤田・衛藤・竹中・麻生（2010）があるが，「学習アシスタント」にあてはまる支援がほぼ100%という結果であった。「学習アシスタント」の内訳を見てみると，原田他（2011）の調査では，クラス全体の学習支援をする補助教員のような役割42.7%，特別支援に関わる子どもへの対応39.1%，保健室や会議室，学内適応指導支援クラス等の別室登校している子どもへの対応21.8%，五十嵐・紺野（2010）の調査では，学習の補助94%，一緒に活動する（休み時間，話し相手）27%，個別支援以外の支援及び教科学習以外の援助15%，教材準備3%，松本他（2010）の調査では，各教科派の授業時への個の配慮28.57%，特別支援学級又は特別支援教室にお

ける授業補助21.42%、昼休み・放課後の学習補助14.29%という結果であった。これらの結果から、特別に支援が必要な子どもに対し個に配慮した支援を担っていることがうかがえる。

これらの実態調査から、学校支援ボランティアの支援内容は、学生Voによるものとそれ以外の地域住民によるもので、異なっていることが示唆される。学生Voにおいては、主に「学習アシスタント」を行うことが多く、教室の中で教員をサポートする役割を担っていることがわかる。「環境サポーター」や「ゲスト・ティーチャー」などを多く担う大学生以外の地域住民によるボランティアに比べると、学生Voの方が、より日々の教育活動の中に入り、直接子どもたちとかかわりながらボランティア活動をしており、特に、個別対応のニーズのある子どもへの支援を担っているといえる。

学校支援ボランティアに対するニーズ

阪根（2006）の調査では、学生Voを活用する理由として「教員の人数不足による支援の必要性」は活用校の85%、「学生にも実習として意義」は活用校の54%、「配慮すべき子どもについてもらう」は活用校の46%が理由として選択している。原田他（2011）の小学校・中学校・特別支援学校を対象とした調査では、学生Voの必要性として、「特別支援に関わる子どもへの対応」が調査校の46.7%（特別支援学校で有意に多い）、「クラス全体の学習支援をする補助教員のような役割」が42.3%（小学校で有意に多い）、「保健室や会議室、学内適応指導支援クラス等の別室登校している子どもへの対応」が35.0%（中学で有意に多い）という結果であった。吉田・藤田（2005）の調査では、学生Voに求められる支援内容として、「様々な総合学習のチーム・ティーチング等に関する補助指導」81.3%、「理科の実験、体育実技指導等の教科に関する補助指導」が71.9%、「野外活動、体育的行事、学芸的行事等の学校行事」が53.1%、「クラブ活動・部活動に関する指導補助」が46.9%、「心身に障害のある児童・生徒の指導介護補助」が53.1%という結果であった。

学生Voに求める資質としては、原田他（2011）の調査では、「子どもが好きだという愛

情」69%、「教育に関わる者としての使命感・責任感」56.7%、「時間や約束を守る、言葉遣いなどの社会性」45%が上位3位という結果であった。吉田・藤田（2005）の調査では、望ましい学生として、「教職履修学生かつ教師志望の強い学生」31.3%、「最低限、教職履修学生」12.5%、「問わない（自由記述からは、意欲的で誠実であれば教職は問わない）」34.4%という結果であった。五十嵐・紺野（2010）の調査では、求める学生の質として、「子どもに対する姿勢（積極的に子どもに接することができる 子ども理解）」48%、「教育・活動に対する姿勢（熱意、誠意）」42%の2つが高いという結果であった。吉岡・相馬・野澤・原・村松（2010）の調査では、「子どもが好き」83%、「明るく前向き」75%、「社会人としてのマナー」67%が上位3つで、「教員希望」は58%、「特別支援教育を専門に学んでいる」は25%となっており、教員を目指しているかということや、知識があるかということよりも、それ以前の人としての資質を求めていることがうかがえる。

これらの調査においては、調査者側があらかじめ提示した項目に対し学校側が必要度を答えるという形式になっている。したがって、学校側の意見を吸い上げたいという項目とは必ずしもいえないため、ニーズ全体を把握しているとは言いがたい。学校側が、学生Voに対して、どのようなニーズを持っているのか、学年や学校種別で異なるのかなどを把握することは、学校側、ボランティア側双方の満足度や有効度を上げるためには必要不可欠と考える。ニーズ把握を、学校と学生双方からの意見を収集したうえで、再度整理することが課題といえる。

学校支援ボランティアの効果・影響

学校側の効果・影響

学校側の変化を検討した調査結果は、以下の通りである。吉岡他（2010）の学校対象の調査では、「児童生徒の役に立っているか」は、とても・やや役に立っているを合わせて100%、「先生の役に立っているか」は、とても・やや役に立っているを合わせて100%という結果である。学校側の負担は、まったくないが67%、あまりないが33%である。児童生徒の変化として

は、「学習意欲が向上」58%、「落ち着いて学習」58%、「授業に参加するようになった」42%、「明るくなった」50%、「他児とうまくかかわることが増えた」42%、クラス全体の変化としては、「落ち着いて学習」75%、「学習意欲の向上」42%と認識している一方で、「落ち着きがなくなった」8%というマイナスの影響も少数ではあるが認識されている。中西（2008）は、教員対象のアンケートの自由記述を分析し、「授業補助では、実習や実技の時間の補助、校外授業の引率補助、事業資料の印刷、採点補助が役に立つ」ということが抽出されている。小島・佐藤・松井（2001）の教員からの自由記述を分析し、学生Voが「児童にとってのメリットは、若いお兄さん、お姉さんということで遊んでもらえる、話し相手になってくれる、授業中の個別指導に役立つ。教師にとってのメリットは、自習の監督、体育用具の準備や片付けなど雑用の手伝い、TTとしての個別指導、校外学習の補助。学校全体としてのメリットは、若い人がいるというだけで学校が活性化する、マンネリ化打開という刺激になる」としている。太田・山本・野嶋（2007）の事例研究では、学習確認、学習受容、雑談を多く行うボランティアが授業に介入することにより、教師は実験場面という作業を行う場面において、児童個人に対する発話度数が増加し、確認の発話を行う比率が高くなった。一方、児童の教師に対する発話は、ボランティアの発話内容や介入有無に影響を受けない傾向を明らかにしている。

学生Voの効果・影響

学生Voの変化のみを検討した調査は以下が挙げられる。麻生他（2009）は、3人の学生Voの活動記録を分析し、「子ども一人ひとりの立場に立って考える力」、「個々の子どもに応じた支援を考える力」、「個別的具体的な問題が起こった際に対処する力が育まれた可能性」を指摘している。玉井（2005）の学生Vo自身の自由記述の評価を分析し、「子どもとの触れ合いによる多様な子ども全体の理解」、「“教師”・指導者の立場が育てる教職意識の成果」、「学校現場からアドバイス・指導を頂いたことと学生の成長」、「教師を目指すことに意欲的になった」というこ

とを抽出している。西松（2007）の学生Vo対象の調査では、活動の効果として、「学校教育活動の理解」、「子ども理解」、「子どもに接する不安の解消」、「教職志望が高まった」に対して90%以上があてはまると回答している。三浦・橋本・林・池田・伊藤・大伴・菅野・小林（2011）の調査では、特別なサポートが必要な児童生徒について、ボランティアをすることでイメージが変化すると64.3%の学生が回答している。小泉（2008）の教職に就いた者と就かなかった者の学生Vo体験の認知の差の検討では、教職に就いた者の方が教職志望が活動後に上がっていたこと、生徒指導、学級経営能力、教育技術（事務）についての自己評定が高まったことを報告している。森下（2010b）は、学生Voの省察的な思考スタイルは、支援の対象や課題、支援目的、役割が明確な場合に確立されることを、活動記録の分析から明らかにしている。

学校、学生Vo双方の効果・影響

学校、学生Vo双方の変化を検討した調査としては、以下が挙げられる。阪根（2006）の調査では、学校側の満足度は、「満足している・やや満足している」92.3%、学生Voの有効点1位は「子供たちに近い立場で対応してもらえ、子供たちからも話しやすい。一緒に遊んでもらえた」、2位「個別指導が必要な児童生徒への対応」である。参加した学生は、自分自身を「いい方向に変化」43.6%、「いい方向にやや変化」43.6%と捉えている。学生Voを活用した学校と活用しなかった学校では、認識に差があり、「学生Voが今後の教職に大いに有効」は活用校69.2%、非活用校38.3%、「学生Voが学校にとって大いに有効」は活用校61.5%、非活用校18.4%となっている。活用校と非活用の意識差が大きいことから、「受け入れ側の不安を払拭し、活用の意義などを、大学や教育委員会等から受け入れ側の学校に積極的に働きかけることが重要」と考察している。

田島・黒沢（2010）は、「ボランティアによる学校支援エンパワメント評価尺度」を試作（5件法、計27項目）し、管理職、活用教師、学生Voの3者で比較検討している。その結果、管理職と教員では、「人手が増えて助かった」、「指

導を充実できた」,「学級全体に目を配る余裕ができた」という項目が高い値となっている。活用教員は管理職に比べ「自分の指導を振り返る機会ができた」という項目が有意に高く,差異が示されている。学生Voとの違いでは,「甘えや問題行動の助長,ボランティアに教師の手を取られた,ボランティアの活用方法が不明」という項目で教師の方が低い得点となっており,学生Voが思うほど教師は負担が増えたとは感じていないことが示唆されている。黒沢・日高・張替・田島(2008)では,学生Voの自由記述を分析しKJ法で分類することで学生の変化と成長を明らかにしている。学生の変化・成長は3グループに分類され,「学生自身の人間的变化・成長」(内面的な変化・成長と他者に対する姿勢の変化),「現場の実践」(教師とのかかわりからの学び・子どもとのかかわりからの学び・子どもから得た喜び・協働のための基本姿勢・対人援助の基本姿勢),「(大学における)授業」(授業の効果,支えあいによる仲間意識)「キャリア教育の視点から見た学生の変化・成長は,「自他の理解能力」と「コミュニケーション能力」の2つに集約された」としている。

酒井(2011)の調査では,学生Vo活用校の100%が教育活動に有益,97%が参加学生Voにとって有益と評価している。また受け入れ校・学生Vo双方の57%が「児童生徒理解の力」が向上すると回答している。

森下・麻生・藤田・久間・衛藤・竹中・大岩(2010a)の調査によると,学校全体への影響・貢献としては教員・学生Voとも「学校が活気づいた」「多くの子どもたちの支援」の2つを認識している一方で,「よくわからない」という回答も20%程度見られた。教員に対する影響・貢献としては「教員の仕事の手助けをすることにより,一人ひとりの子どもに割ける時間が増える」という回答が最多で教員28.6%,学生Vo76%が認識している。また教員は,「自分も学ぶことができた」20%,「下手な授業は見せられない,緊張感がある」18.6%という影響も認識しており,「学生の真剣な眼差しが,学校現場で働く教員に適度な緊張感を与え,自己を振り返るきっかけを与えることにつながっていると教員が認識していること」が意義の一つと考察され

ている。児童生徒に対する影響・貢献としては,「学習意欲が増した」教員28.6%,学生Vo48%,「学生を心待ちにしている・大好きである」教員54%,「先生とは違う形でコミュニケーションをとれた」学生Vo36%,「外でいっぱい遊ぶ」学生12%と認識している一方で,「学生が来ることで落ち着きを失う」教員5.7%とマイナスの影響を認識している教員も若干いることが示されている。

五十嵐・紺野(2010)の調査では,学生Vo活用により学校側は,「児童生徒の変化」は少し・すごくあった90%で,内訳は「学級全体の学習意欲の向上」24%,「学生Voが来るのを楽しみしている」27%であり,理由として「年齢が近く,親近感があるから」としている。教職員の変化も,少し・すごくあった58%で,内訳は「人的な変化」57%(対応に余裕ができた負担軽減),「意識的な変化」29%(若い人が来ることで活気が出た)となっている。学生Voは,「児童生徒の変化」を75%が認識し,特に「学習意欲の向上」25%など,対象児の変化が学級の変化より多く認識している。学んだこととして,「教員について(自覚,学級経営の仕方など)」50%,「子どもについて」44%を挙げ,教員志望について「強くなった」は31%が認識している。

保護者の意識

保護者の意識を調査したものは,檜内・宮前・長谷川・森・光村・出石(2003)のみである。小学生の保護者対象の調査で,学生Voによる学習ルームの開室に対して,平成13年度では学生Voの参加はよいこと76.9%,条件次第ではよいこと23.1%,平成14年度では参加はよいこと93.2%,条件次第ではよいこと6.8%と継続により,プラスの認識が増えていることを報告している。理由としては「教える側の人数が増え,細かい指導ができるから,年齢が近くて子どもにとって親しみやすいから,教員志望の大学生が現場を知る良い機会になるから」ということが挙げられている。

以上の結果を概観すると,学生Voは総じて肯定的な評価を受けていることがわかる。学生

V₀が学校に入ることで、逆に負担が増える、あるいは学校が混乱するなどの否定的な評価はごく少数である。それらの学生V₀による肯定的な効果や影響は、児童生徒だけではなく、学校全体、教員、そして学生自身にも生じていることがわかる。Table 1にこれらの結果を分類したものを載せた。児童生徒の変化としては、「学習意欲の向上」「個人の変化」「学生V₀への興味関心」「学生V₀ならではのかかわり」に分類できる。支援内容の検討の結果、学生V₀は「学習アシスタント」が多いということが明らかとなった。しかし、この結果を見ると、「学習アシスタント」として学校に入るが、勉強だけ教えているのではなく、遊んだり話したりと直接子どもとかかわりを持ち、一緒に活動していることがうかがえる。そのことで、学習面以外にも児童生徒に影響を及ぼしていることが示唆される。学校・教員の変化としては、人手が増えることでの「負担軽減」、それにより「指導の充実」がもたらされること、学生V₀という若い人材が学校に入ることでの「活性化」や教師自身の「内面的変化」が挙げられる。学生V₀の変化としては、学校という組織の中で、実際に児童生徒とかかわることでの「子ども理解」や「対処能力」、「協働のための基本姿勢」が身につくこと、経験を通して自分自身の「成長の実感」を得られること、子ども理解だけではなく、「教職・学校教育についての意識が向上」することが挙げられる。「協働のための基本姿勢」「教職・学校教育についての意識の向上」は、学校という場における学生V₀ならではの効果といえるのではないだろうか。森下他(2010a)も「互惠性のある活動として学校現場と学生に認識されている」と指摘しているように、学生による学校支援ボランティアは、学校・子ども・学生の三者にとって肯定的な影響力を持ちうるものであることが示唆される。

今後は、田島・黒沢(2010)の指摘する「利害関係者をエンパワメントできる評価」、つまり学校・子ども、学生V₀にとってボランティア活動がどのような効果や影響があるのかを三者にフィードバックしていくことで、さらなる活動の充実と支援内容の検討に生かしていく視点が必要と考える。そのためには、学校・子ども

も・学生V₀の3つの側面から効果を測る尺度の開発と継続したデータの蓄積が望まれる。

学校支援ボランティアのシステム

学生ボランティアの報告は、先述したとおり、大学の教員養成課程が派遣事業として実施しているものがほとんどである。学校支援ボランティアの実践報告として発表している大学は、愛知教育大学、広島大学大学院教育学研究科附属障害児教育実践センター、北海道教育大学函館校、北海道教育大学釧路校、香川大学教育学部、目白大学人間学部心理カウンセリング学科、大分大学教育福祉学部、佐賀大学、志賀大学教育学部、静岡大学教育学部付属教育実践総合センター、大正大学、徳島大学の実践がある(Table 2)。これらのシステムを概観すると、大学のかかわり方として、学生V₀募集の窓口としての役割のみ果たすシステム(五十嵐・紺野, 2010; 西松, 2007; 阪根, 2006; 山本, 2009)、事前指導まで実施するシステム(滝沢, 2007)、活動期間を通じて学生V₀をサポートするシステムに分けられる。活動期間を通して学生V₀をサポートするシステムには、授業として単位化しその中でサポートしていく大学(麻生他, 2009; 黒沢・日高, 2009; 酒井, 2011; 玉井, 2005)と、単位化はせず担当教員が相談担当して適宜サポートしていく大学(寺田・秋元, 2008; 吉岡他, 2008)がある。ボランティアの単位化については、そもそもボランティアの基本理念である「自発性」「無償性」にそぐわないという意見もある。吉田・藤田(2005)は、学校を対象とした調査を分析し、「教育現場からは、無条件の受け入れではなく、つねにそこに派遣される学生の資質が問われている」とし、大学における安易な実践化(たとえば授業の必修単位とすること)により、学校が混乱することの危険性を提言している。一方で、玉井(2005)は、学校教育におけるボランティアの「自発性は活動の要件ではなく活動の成果ととらえる」という2002年の中央教育審議会答申の見解を引用し、学生V₀の活動を準必須の授業として単位化することの意味を述べている。

学校支援という視点に立てば、単位化の有無が問題なのではなく、学生V₀の質を高め、学校

Table 1 学生ボランティアの効果・影響

児童生徒	学校・教員	学生Vo
学習意欲の向上	負担軽減	子ども理解
学習意欲が向上	対応に余裕ができた	児童生徒理解の力
学習意欲が増した	負担軽減	子どもについて
授業に参加するようになった	人手が増えて助かった	子ども一人ひとりの立場に立って考える力
落ち着いて学習		個々の子どもに応じた支援を考える力
	指導の充実	子どもとの触れ合いによる多様な子ども全体の理解
ボランティアへの興味関心	指導を充実できた	子ども理解
学生を心待ちにしている・大好きである	教える側の人数が増え、細かい指導ができる	子どもの発達を直に感じ取れる機会
学生ボランティアが来るのを楽しみしている	個別指導が必要な児童生徒への対応	子どもの行動の意味を考える機会
	授業中の個別指導に役立つ	
児童生徒個人の変化	多くの子どもたちの支援	成長の実感
明るくなった	一人ひとりの子どもに割ける時間が増える	内面的な変化・成長
他児とうまくかかわることが増えた	学級全体に目を配る余裕ができた	教師とのかかわりからの学び
	児童個人に対する発話度数が増加	子どもとのかかわりからの学び
学生ボランティアならではのかかわり	教室に支援の手と目が増えた	子どもから得た喜び
外でいっぱい遊ぶ	教師とは異なった視点からの子どもの観察	学校現場からアドバイス・指導を頂いたことと学生の成長
遊んでもらえる		
話し相手になってくれる	活性化	協働のための基本姿勢
一緒に遊んでもらえた	若い人がいるというだけで学校が活性化	協働のための基本姿勢
先生とは違う形でコミュニケーションをとれた	マンネリ化打開という刺激になる	コミュニケーション能力
子供たちに近い立場で対応してもらえ、子供たちからも話しやすい	若い人が来ることで活気が出た	他者に対する姿勢の変化
年齢が近くて子どもにとって親しみやすい	学校が活気づいた	自他の理解能力
お兄さんの・お姉さんの存在を生かして、子ども達と触れ合っていた		対人援助の基本姿勢
	教員の内面の変化	他者との関係づくりを自分で工夫
	自分も学ぶことができた	対処能力
	下手な授業は見せられない、緊張感がある	個別的具体的な問題が起こった際に対処する力
	自分の指導を振り返る機会ができた	子どもに接する不安の解消
		教職・学校教育についての意識の向上
		教職志望が高まった
		教員志望について強くなった
		学生ボランティアが今後の教職に大いに有効
		学校教育活動の理解
		教員について（自覚、学級経営の仕方など）
		教員志望の大学生が現場を知る良い機会になる
		“教師”・指導者の立場が育てる教職意識の成果

の役に立つような活動を継続して行くために、専門知識を持った大学側が学生をサポートするシステムが確立しているか否かの方が問題なのではないかと考える。しかし、大学が学生Voに対して実施した教育的介入の効果についての研究は、森下(2011a)、日高他(2009)、三浦他(2011)しか見当たらない。森下他(2010c, 2011a)は、専門的知識を有した大学教員によってなされる個別的で協同的な関わり(活動記録に対するコメントと振り返り活動)の支援体制が省察的实践を支え、大学教員による活動指導コメントは学生の関与的活動を促し、関与的・因果的省察を装荷させ、教員による活動評価コメントは学生Voの省察の質を維持させる効果があるとしている。日高・黒沢・平部・田島(2009)は、学生Voがアクセスしやすい教員体制の提供、多様な指導・支援の提供(授業における集団事例検討、学生の求めに応じての随時指導、危機状況への緊急対応)という枠組みにおけるサポート体制により、学生Voの授業・活動に対する動機づけの高まり(集団事例検討やグループ討議の意義が示唆)と授業へのコミットメントの高まりを報告している。三浦他(2011)は、ボランティアに関わる授業の受講とボランティア実践を組み合わせることで、怖さや緊張感の低減が図られることを報告している。

学生Voの活動に対しては、学校や教育委員会から大学が何らかの役割を取ることが期待されており、その要請を受けて大学を中心としたシステムの構築が模索されているのが現状といえる。募集といった派遣の窓口の役割のみを請け負う大学もあるが、その後のサポート体制も行っている大学の報告も多い。今後は、システム構築による効果の検証が積み重ねられることで、学校と学生Vo双方にとって有益なシステム構築、研修内容のプログラム化が図られることが期待される。

今後の課題

いじめ、不登校、特別支援など学校が抱える問題への対応を考えるとき、時間的にも精神的にも現在の教員の過剰負担は避けて通れない課題である。そのような中で、学校支援ボランテ

ィアの役割は、大きな可能性を持っていると考える。学校支援の戦力としての学生Voの活用、ボランティア体験による質の高い専門職の輩出という2つの可能性である。学生Voに対して、学校や大学生が興味を持ち、活動に参加してもらうためには、活動の効果をより高め、その効果を公表し理解してもらうことが必要となる。そのためは、以下の3点が今後の課題であると考ええる。

第一に、ニーズの把握である。学校側のニーズは、これまでの調査では調査者側の見解が反映されたものといえる。よって再度学校側のニーズを調査によりデータ収集し整理する必要がある。一方で、学生Vo側のニーズ把握をしている調査は見当たらない。学生Voはボランティアである限り、廣瀬(2003)が主張するように「学校支援に傾斜」するのではなく「ボランティア自身の成長や発達といった視点」が重要で、互恵性のある活動でなければならない。したがって、学生Vo側のニーズも把握し、双方のニーズ把握が可能になることで、双方の満足度を高めることが期待できる。学校側からのニーズは、学生Voに対する研修プログラムの内容の選定に反映させることができ、学生Voからのニーズは、派遣学校の決定や学校における活動内容の決定に反映させることができるからである。

第二に、ボランティア活動による学校・子ども・学生Vo三者の効果を測る尺度の開発と効果に関連する要因の検討である。学生Voの効果は、活用学校の多くが認め、学生Vo自身も満足度を持っていることは、これまでの調査から明らかになっている。しかしそれらは、現段階では個々の実践の実態把握にとどまり、統計的な手法を用いた実証的な検証はなされていない。効果測定のための尺度の開発により、実証的なデータが収集することで、実践間での比較も可能となり、効果に影響を及ぼす要因の検討も進めていくことができると考える。

第三に、ニーズと効果に影響を及ぼす要因を反映させた研修プログラムを含めたシステムとの開発とその効果の検討である。大学においては、サポートシステムや教育的介入の効果の検証をさらに積み重ね、効果的なシステムを確立していくことが課題と考える。

Table 2 学生Vo派遣を実践している大学の主要論文

	調査対象	調査内容	実践者	システム
麻生他 (2009)	学生Vo 3人の活動記録の分析	自己省察と体験・育まれた資質		
松本他 (2010)	派遣事業の実践報告			
森下他 (2010a)	小・中学校教員70名, 参加学生50名を対象としたアンケート調査	学校全体への貢献・教員に対する影響・児童生徒に対する影響など		
森下 (2010b)	学生Vo 8名の活動記録の分析	活動記録の中に含まれる省察的な記述文を分析し, 学生の思考スタイルの特徴を評価	大分大学教育福祉科学部の実施している派遣事業「まなびんぐサポート」	大学と市教委が連携 大学教員によるサポート体制 単位取得も可能
森下 (2010c)	学生Vo52名の活動記録の分析	支援体制の学生の学習への影響		
森下他 (2011)	参加学生6名対象 HP上に提出した活動記録と大学教員のコメント	学生Voの活動記録における大学教員がコメントを返すという教育的介入の効果进行分析		
檜内他 (2003)	参加児童の保護者対象アンケートH13年度39名 H14年度53名	学生に対する評価	香川大学の学生ボランティアによる学習ルームへの支援活動の実践	大学と学校が連携 学生派遣と大学教員による個別相談
日高・黒沢 (2007)	学生29名, 教員39名, 管理職24名を対象としたアンケート調査	Voによる学校支援エンバワメント評価尺度, 子どもの行動チェックリスト(事前事後)		
黒沢他 (2008)	参加学生179名の振り返りシート, 活動評価アンケート 自由記述をKJ法で分析	学生の変化	目白大学人間学部心理カウンセリング学科の「メンタルサポート/ボランティア」派遣実践	大学と教委と学校が連携 単位化し授業によるサポート
日高他 (2009)	メンタルサポート・ボランティアの実践報告			
黒沢・日高 (2009)	学校支援学生ボランティア派遣活動のシステム構築の実践報告			
田島・黒沢 (2010)	学生Voの自由記述を分析	双方向的授業の教育成果を検討		
五十嵐・紺野 (2010)	学生ボランティア活用校33校を対象としたアンケート調査	活用理由・支援内容・打ち合わせについて・児童, 教職員の変化, 希望する学生の質など	北海道教育大学函館校で実施されている学生による学校支援ボランティア派遣事業	大学と地域連携センターが連携 授業によるサポートはなし
中西 (2008)	児童・教員対象アンケート(人数不明)	自由記述	佐賀大学, 研究室から小学校へ学生Vo派遣	研究室単位で, 特定の小学校1校に学生を派遣
西松 (2007)	学部生および大学院生55名 アンケート調査	ボランティアの効果 学生への支援体制 学校の受け入れ体制 ボランティアへの満足度・活動してよかったこと・困ったこと	滋賀大学教育学部の実践	学校からの依頼を教育学部地域教育支援室が取りまとめ, 学生を派遣 地域教育室にて事前指導実施
酒井 (2011)	活用校と学生対象のアンケート調査 受け入れ校37か所, 学生70名	学生の参加理由・活動内容・活用校の評価など	静岡大学教育学部附属教育実践総合センターが実施している学生ボランティア派遣事業	事務手続きをセンターが一括して請け負う 市教委とも連携 単位取得可能「学生ボランティアの手引き」あり
阪根 (2006)	香川県の小中学校を対象39校活用校 201校不活用校	支援内容・活用する/しない理由・満足度・学生の変化・有効な点など	香川大学教育学部と県教委が連携した学生ボランティア派遣事業	登録作業を大学, 派遣作業を県教委
滝沢 (2007)	実践報告		大正大学, 大学教員の実践	豊島区立中学校への学生TA派遣 大学教員による事前指導と派遣校でのガイダンスあり
玉井 (2005)	実践報告と学生評価の分析	参加理由・成果	北海道教育大学釧路校の実践	教育実習の中間的な性格 教育実習入門, 事前教育実習的な性格を持つ「ボランティア実践」を単位化

寺田・秋元 (2008)	学生Vo39名、教員88名対象のアンケート調査	サポーター経験に伴う困難さ・児童生徒への影響・教職員への影響	広島大学大学院教育学研究科附属障害児教育実践センターの「特別支援教育学生サポーター派遣事業」	大学と学校間の連携・調整、学生の支援・育成を行うコーディネーターチームを構成
山本他 (2009)	活用校と学生対象の面接とアンケート調査 (人数不明)	自由記述	徳島市、徳島県の特別支援教育への支援事業として大学生を学習支援Voとして派遣	手引き作成、研修会の実施、学生の相談対応 市教委、県教委、特別支援学校と連携 大学は募集と教委への推薦、教委と特別支援学校は研修、派遣学校との連絡調整等
吉岡他 (2008)	システム構築の実践報告			学校支援コーディネーター4名・大学教員1名配置 支援が必要とされる児童生徒に対して人材の要望を確認し、学生を派遣する 学生の指導・相談 研修会月2回実施
吉岡他 (2010)	学校12校対象のアンケート調査	支援学級・役立ち・負担・児童生徒/クラスの変化・学生の資質・希望頻度についてなど	愛知教育大学の発達障害児のための学校支援ボランティア事業	
林他 (2009)	奈良市内公立幼小中学校教員対象アンケート調査 1894名	地域住民による支援内容・望まれる属性・評価の高い支援・支援の必要度・養成・認証制度の必要性など		
原田他(2011)	小・中・高・特別支援学校1349校対象のアンケート調査	学生Voが必要な理由・サポート内容・必要度・求める資質など		
小泉 (2008)	学生Vo経験1年後37名アンケート調査	教職志望度評定・教職能力自己評定尺度・教師能力重要性評定など		
小島他 (2001)	教師対象のアンケート調査 16名	自由記述		
三浦他 (2011)	「障害児の発達と教育」を受講した学生593名	教職志望・ボランティア経験の有無・ボランティアについての不安など		
太田他 (2008)	学校Voが参加する授業の発話分析	Voの介入による教員の発話と児童生徒の発話の影響について		
清國 (2011)	Y県学校支援地域本部事業に関する調査 Vo参加者2407名	Voの属性・活動回数・活動内容・自己変容など		
高橋 (2006)	青森県教育委員会が学校574校を対象に実施したアンケート調査	活用状況・支援内容・人材属性・打ち合わせの方法・効果		
高橋 (2007)	青森県教委が実施6学校を通して数名のVoに回答を求め676名の回答	属性・立場・形態・活動分野(支援内容)・回数など		
吉田・藤田 (2005)	つくば市公立小中学校48校対象のアンケート調査	活用校の割合・学生に対する希望・望ましい学生・求められる支援内容・必要としない理由など		

【引用文献】

- 麻生良太・松本 正・大岩幸太郎・藤田 敦・竹中真希子・衛藤裕司 (2009). 学校支援ボランティアに参加した大学生自己省察と体験—大分大学教育福祉科学部における「まなびんぐサポート」事業を通して—大分大学教育福祉科学部研究紀要, **31**, 165-177.
- 繪内利啓・宮前義和・森 俊博・光村拓也・出石良美 (2003). 学生ボランティアによる学習ルームへの支援活動—香川大学教育実践総合研究, **7**, 71-85.
- 原田直樹・梶原由紀子・吉川未桜・樋口善之・江上千代美・四戸智昭・杉野浩幸・松浦賢長 (2011). 大学生ボランティアによる学校児童生徒への支援ニーズに関する研究—福岡県立大学看護学部紀要, **8**, 1-9.
- 林 美輝・淡野明彦・片岡弘勝・丹羽亜矢子・高橋豪仁 (2009). 教員から見た学校支援—奈良市内公立幼小中学校教員のアンケート調査から—奈良教育大学紀要, 人文・社会科学, **58**, 169-180.
- 日高潤子・黒沢幸子 (2007). 「メンタルサポート・ボランティア」による学校教育支援—精神臨床サービス, **7**, 121-124.
- 日高潤子・黒沢幸子・平部正樹・田島佐登史 (2009). 学校支援ボランティア学生を対象とした双方向的授業の教育成果: 学生の動機づけと学習へのコミットメントを高める工夫—目白大学高等教育研究, **15**, 27-34.
- 廣瀬隆人 (2003). 学校支援ボランティアの概念の検討—宇都宮大学生涯学習教育研究センター研究報告, **10・11**, 25-34.
- 五十嵐靖夫・紺野亜衣 (2010). 特別支援教育における学校支援ボランティアについての考察—北海道教育大学紀要, 教育科学編, **61**, 133-145.
- 小泉令三 (2008). 教員養成学部学生の学校支援ボランティア活動体験と教職能力の認知の関係—教職に就いた者と就かなかった者の比較—福岡教育大学紀要, 第4分冊, 教職科編, **57**, 49-54.
- 小島 彰・佐藤貴子・松井純子 (2001). 学校支援ボランティア実践ノート—福島大学教育実践研究紀要, **40**, 33-40.
- 鹿児島市教育委員会 (2010). 「地域の子は地域で育てる」体制づくりを目指して—小学校区での学校支援ボランティア事業の取組をとおして—文部科学時報, **8**, 17-18.
- 清國祐二 (2011). 学校支援ボランティアに関する調査研究—Y県での調査から導き出されること—香川大学生涯学習教育研究センター研究報告, **16**, 19-28.
- 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター (2008). 学校支援ボランティア活動の推進方策に関する調査研究報告書—http://www.nier.go.jp/jissen/chosa/rejime/2008/07_volunteer/99_all.pdf
- 黒沢幸子・日高潤子 (2009). 臨床心理的地域援助としての学校支援学生ボランティア派遣活動のシステム構築—心理臨床学研究, **27**, 534-545.
- 黒沢幸子・日高潤子・張替裕子・田島佐登史 (2008). 学校教育支援ボランティアを体験した学生の変化・成長—その様相とキャリア教育の視点からの考察—目白大学心理学研究紀要, **4**, 11-23.
- 松本 正・大岩幸太郎・藤田 敦・衛藤裕司・竹中真希子・麻生良太 (2010). 学校支援ボランティアの現状と課題—大分大学教育福祉科学部「まなびんぐサポート」事業の検討を通して—大分大学教育福祉科学部研究紀要, **32**, 97-105.
- 三菱総合研究所 (2010). 「学校支援地域本部事業」実態調査研究—http://www.mri.co.jp/NEWS/press/2010/nr20100602_hlu05.pdf
- 三浦巧也・橋本創一・林安紀子・池田一成・伊藤良子・大伴潔・菅野 敦・小林 巖 (2011). 特別なサポートを必要とする児童・生徒に対する学校支援ボランティアに関する調査研究: 教員養成系—大学の学生が授業や体験等を通して得た気づきの分析—東京学芸大学紀要, 総合教育科学系, **62**, 279-285.
- 森下 覚・麻生良太・藤田 敦・久間清喜・衛藤裕司・竹中真希子・大岩幸太郎 (2010a). 学校現場における学校支援ボランティアの意義についての教員と大学生の認識—大分大学教育福祉科学部「まなびんぐサポート」事業を通して—教育実践総合センター紀要, **28**, 99-106.
- 森下 覚・麻生良太・藤田 敦・久間清喜・衛藤裕司・竹中真希子・大岩幸太郎 (2011). 学校支援ボランティアの参加学生に対する教育的介入の効果—大分大学教育福祉科学部「まなびんぐサポート」事業を通して—大分大学高等教育開発センター紀要, **3**, 15-27.
- 森下 覚・藤田 敦・麻生良太・久間清喜・衛藤裕司・竹中真希子・大岩幸太郎 (2010b). 学校支援ボランティア経験による省察的思考スタイルの変容—「まなびんぐサポート」活動記録の分析を通して—教育実践総合センター紀要, **28**, 107-118.
- 森下 覚・久間清喜・麻生良太・衛藤裕司・藤田

- 敦・竹中真希子・大岩幸太郎 (2010c). 学校支援ボランティアにおける省察的実践の支援体制と実習生の学習の関連性について—大分大学教育福祉科学部「まなびんぐサポート」事業を通して— 大分大学教育福祉科学部研究紀要, **32**, 261-275.
- 文部科学省生涯学習政策局 (2008). 文部科学省におけるボランティア活動の推進について http://www.jasso.go.jp/syugaku_shien/documents/20tudoimext.pdf
- 中西雪夫 (2008). 学校支援学生ボランティア報告 佐賀大学教育実践研究, **25**, 185-202.
- 西松秀樹 (2007). 学校支援ボランティアの現状と課題 パイディア：教育実践研究指導センター紀要, **15**, 27-33.
- 太田史香・山本裕子・野嶋栄一郎 (2008). 授業場面上における学校支援ボランティアの役割に関する事例研究 日本教育工学会論文誌, **31**, 145-148.
- 酒井宣幸 (2011). 静岡大学における学生による学校支援ボランティア活動の実態と課題：参加学生および受け入れ校に対するアンケート調査から 静岡大学教育実践総合センター紀要, **19**, 121-129.
- 阪根健二 (2006). 学校ボランティア活動の実態と課題 香川大学教育実践総合研究, **13**, 15-22.
- 田島佐登史・黒沢幸子 (2010). 分科会報告 (教育領域) 学校・教育領域において役立つ評価 コミュニティ心理学研究, **14**, 31-42.
- 高橋 興 (2006). 学校と地域の協働による教育活動の現状と課題—学校支援ボランティアを中心として— 日本生涯教育学会論集, **27**, 61-70.
- 高橋 興 (2007). 学校支援ボランティアの現状と課題 生涯学習研究：宮崎大学生涯学習教育研究センター研究紀要, **12**, 35-49.
- 滝沢和彦 (2007). 学校支援ボランティアの展開と課題—2年目の経験から見えてきたもの— 長岡大学生涯学習研究年報, **1**, 81-90.
- 玉井康之 (2005). 単位認定を伴う〔北海道教育大学〕釧路校方式「ボランティア実践」の意義と教育効果 教科教育学研究, **23**, 215-229.
- 寺田容子・秋元雅仁 (2008). 特別支援教育体制における小・中学校と大学生との連携に関する考察 広島大学大学院教育学研究科附属障害児教育実践センター研究紀要, **5・6**, 13-24.
- 山本真由美・長積 仁・大橋 眞・金丸 芳・寺嶋吉保・長宗雅美 (2009). 特別支援教育における学生ボランティアの活用の試み 大学教育研究ジャーナル, **6**, 102-107.
- 吉田武男・藤田晃之 (2005). 小中学校における学生ボランティアの可能性に関する予備的考察 筑波大学教育学系論集, **29**, 111-118.
- 吉岡恒生・相馬慎吾・野澤宏之・原 恵美子・村松麻美 (2010). 発達障害児のための学校支援ボランティア事業 (3)—3年間を振り返って— 愛知教育大学研究報告, 教育科学編, **59**, 29-37.
- 吉岡恒生・柴田和美・相馬慎吾・野澤宏之・原恵美子・山内麻美 (2008). 発達障害児のための学校支援ボランティア事業—初年度の取り組み— 愛知教育大学研究報告, 教育科学, **57**, 111-119.

A review of the studies on school support volunteer

Kie Sugimoto Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2013 vol.9

【Abstract】

The objective of this paper is to understand of the current status of school support volunteering by university students through an overview of previous research and to identify the issues. As a result of summarizing the current status, it was found that many reports of student volunteers are projects by teacher training courses of universities, the major activity is the support of learning, especially the support of children with individual needs for support, that both the schools and the students positively evaluate the activities and that the system of dispatching students may be classified into three types according to the degree of involvement of the university. However, the present state of these researches do not go beyond the understanding of the actual conditions, and it cannot be said that statistical examination is being conducted. Future tasks is the following three points, ①gaining understanding of the needs on the sides of both the schools and the students ②development of a scale for measuring the benefits of volunteers and ③study of the factors which exert influence on the benefits.

keywords : volunteer activity, school support, university students